（C）日刊スポーツ新聞社

サッカー部1部復帰の道

流通経大 スポーツ健康科学部スポーツコミュニケーション学科の学生たちが取材し探った

流通経大サッカー部が、今季から再び関東大学サッカー1部リーグに復帰する。2019年に11位となり、03年以来17年ぶりに降格したが、昨年2部で優勝を果たした。過去3度の1部優勝、14、17年には全日本大学サッカー選手権で優勝した経験もある強豪。わずか1年で果たした復活の裏側や魅力を探るべく、流通経大スポーツ健康科学部スポーツコミュニケーション学科の学生たちが、サッカー部の選手やマネジャーを取材し、紙面化した。

曹貴裁コーチの教えで成長宮本「球際やラインの50センチをサボらない」

大きな基盤築いた1年

強い流通経大サッカー部が戻ってきた。2部リーグで優勝して1部昇格。総理大臣杯全日本サッカートーナメントの関東地区予選を兼ねたアミノバイタルカップでも初優勝を果たした。2年ぶりに1部で戦う来季に向けて、大きな基盤を築く1年だった。

復活には、曹貴裁コーチの存在が大きかった。湘南の監督としてJ1昇格へ導くなどプロの経験豊富な指導者は、華麗な技術よりもピッチ上での考え方を徹底した。浦和入りが内定しているMF宮本優太（3年）が曹コーチの指導内容を明かす。「球際やラインの50センチをサボらない。半歩でもダッシュする。転んだらすぐに立ち上がる。シーズンを通して、その意識でやれた。一昨年よりもこだわってできたと思います」。長期間に及ぶリーグ戦では苦しい時期もあったが、これらの原点が支えになった。

宮本優太

来季のチームはさらなる飛躍が期待される。J2京都の監督に就任した曹コーチを抜きに、09年以来となる1部優勝、17年以来の日本一に挑む。MF安居海渡（3年）が「曹コーチが練習にいる時といない時では雰囲気が全く違っていました。これからは、いない状態でどう練習するかが大事」と、選手自身の意識を課題に挙げた。曹コーチから多くを学んだ3年生が中心となり、チームを引っ張っていく。

FW満田誠（3年）は、来季の目標を「全タイトルの獲得」と言う。「昨年は達成することができなかったけど、全タイトルを獲得できる力があります」。2部降格という苦難を乗り越えた流通経大サッカー部は、さらに輝きを増していきそうだ。【木村貫】

伊藤敦樹

加藤千尋

内田采良（3年）「大学生という立場で日刊スポーツの記事を作成できる経験は流経大ならではの大きな魅力だと感じています。成功だけで終わる活動が少ないからこそ日々実践から学びを得られています」

木村貫（3年）「選手にどのような言葉で聞けば答えやすいか、またどのような文章にしたら読者が読みやすいかを意識して取り組むことができました」

足立紗希（3年）「新聞記事など『私には書けない』と思っていたけれど、こうして形になりました。高校生の皆さんも、流通経大に来て何か大きな挑戦してみませんか？」

家重歩武（3年）「取材で多くのことを学べました。流通経大はたくさんのことに挑戦でき、大きく成長できる場だと思います」

青山百花（3年）「流通経大では今回の紙面制作のように、他の大学ではなかなかできない活動に多々参加できます。自分の可能性を見つけ、視野を広げることができていると思います」

◆流通経済大学　1965年（昭40）開学。現在は5学部9学科5大学院研究科を擁し、学生数は約5500人。4万人を超える卒業生は、ビジネス界はもとより、公務員、教員など多方面で活躍。多くのプロスポーツ選手も輩出している。17年度大学選手権優勝の男子サッカー部、関東大学リーグ優勝3回の男子ラグビー部、東京新大学18年度秋季リーグ優勝の硬式野球部、日本学生選手権18年度男子団体優勝のトライアスロン部などの部活動も注目される。新松戸キャンパスは千葉県松戸市新松戸3の2の1、龍ケ崎キャンパスは茨城県龍ケ崎市120。野尻俊明学長。問い合わせは入試センター☎0120・297・141。

コロナ禍で活動自粛…野々村「サッカーできるありがたみ感じた」

トレーニング工夫

サッカー部もコロナ禍により2月から約1カ月半、活動休止を余儀なくされた。個々の選手がランニングや筋力トレーニング、体幹を鍛えるなど工夫して過ごした。体験したことのない日々を過ごし、DF野々村鷹人選手（4年）が「あらためてサッカーができるありがたみを感じた。自分を見つめ直す時間も少し作ることができてよかった」と振り返るように、自粛期間も前向きにとらえていた。

今も市外に行くことや、カラオケ店など密になりやすい場所への出入りは禁止されている。また、「どこで誰と何をしたか」などを記す動静表やコンディションチェックを毎日提出している。昨年末には帰省が認められたが、帰寮時には抗体検査が実施された。コロナにより先の見えない状況が続くが、その中でも対策を講じ、節度を守って、来季に向けて活動を続けている。【足立紗希】

野々村鷹人

プロ入り4人伊藤➡浦和、加藤＆アピアタウィア➡仙台、野々村➡松本

スタメン目指す

今年は流通経大から4人がプロ入りする。J1へはMF伊藤敦樹が浦和、DF加藤千尋、DFアピアタウィア久が仙台入り。J2ではDF野々村鷹人（いずれも4年）が松本山雅に加入する。

伊藤は浦和の下部組織出身とあり「レッズに戻りたかった。流通経大の名に恥じないプレーで、スタメンに定着したい」と意欲を語った。

加藤は、曹コーチから「仲間に信頼される選手になれ」という言葉を送られたという。「小さい頃からプロ入りを夢見ていた。1年目からスタメン出場を果たし、日本代表、海外でも活躍できるようになりたい」と話した。

また、野々村は「同期の選手に負けないよう、いつか自分もJ1の舞台で戦えるように頑張りたい。誰よりも努力して試合に出たい」と意気込んでいた。【家重歩武】

柳沢マネジャー「仲間のため、どんな状況でも応援、サポートできる」

「感染者出さず終われ安心した」

「仲間のため、どんな状況でも応援、サポートできるのが流経大サッカー部の魅力です」。柳沢凛マネジャー（2年）はそう語る。

1部復帰への道は、コロナとの戦いでもあった。試合前日にホテルを宿泊する際は、選手を1人部屋にし、食事の際は他の宿泊客と接触を減らすよう時間をずらすなどした。マネジャーがホテル側と連絡を取り合い最善の策を講じた。毎日の体温管理を欠かさず、試合ではスクイズボトルの選手間での共有を避けるなど工夫をしたという。柳沢マネジャーは「感染者を出さずにシーズンが終われ、安心しました」。こうした努力も、チーム躍進の大きな要因だった。

昇格を決めた時は「素直にとてもうれしかったです。1部復帰はマストだと考えていたので一安心した感じです」というさらに「リーグ戦が出来たのは多くの関係者、補助員として大会を支えてくれた部員たちのおかげでもあるので、感謝をチームの結果で返せたので良かったです」と、部員への感謝を口にした。

20年度の部員数は、マネジャーやスタッフを含めて部員204人。この大所帯が互いに助け合い、それぞれの責任を果たしたからこそ、目標を達成できた。ピッチに立つ選手ばかりでなく、部を支えるマネジャーの活躍を今後も期待したい。【青山百花】